

今どき若者

マジで

カンボジア支援

長い金髪男子に、縦口の髪の髪の子。派手な大学生男女がカンボジアに学校や病院を建てている。資金源は、重低音のダンス音楽が鳴り響くイベントの収益だ。そんなボランティア活動のサークル「GRAPHIS」(グラフィス)を設立した石松宏章さん(26)は「日本とは違う世界があることを、多くの若者に伝え、頭の片隅でいいから考えてもらいたい」と語る。(加藤裕治)

「鳥肌が立った」。カンボジアの首都プノンペンからバスで六時間。まばらに木々が生える村に二〇〇六年六月、グラフィスの小学校が完成した。派手な服装のメンバーを、道の両脇に並んだ現地の子どもたちが笑顔

イベント収益で学校、診療所建設



●2007年、カンボジアで撮影活動する石松宏章さん(右)グラフィスの資金源建設されたカンボジアの小学校。いずれも映画製作「GOMジカチ提供



と拍手で迎えた。「感謝した。当初、収益は飲み会とされていると実感し、で使い切っていた。「何た、なんかカッコイイ」とイベントが本気モードになった。軽い気持ちで始めたボランティア活動が本気モードになった。はじめた時、友人から「じ始めた時、友人からメロが届いた。東京医科大学の学生だ。石松さんは、ナンパと合コンのサークル仲間ではないか?」とつくり、東京・六本木百五十万円を非政府組織のクラブで学生たちの交際(NGO)に託せば、流イベントを開いて、現地に学校が建つ支援もなし。ネットに流れて

ログラムを知らせてきた。模イベントは失敗。約百四十万円の借金を抱え、カンボジア支援どころか親に泣きついた。落ち込んだ時、カンボジア政府やNGOの関係者に励まされ、現地で活動するパートナーも見つかった。石松さんは今春、サークルを後輩に引き継いで

いる情報をしゃべっているだけ。説得力がない」と石松さん。これではないと現地を訪ねた。たどり着いたカンボジアの村。曇りと温気の中で、十分な教育を受けられない子どもたちが暮らしていた。現地のエイズ病院にも行った。医療機器は不十分で患者は放置に近い状態。ショックを受けた。医大生だったこともあり学校の次は診療所を建てようと考えた。ボランティア活動といっても、まったくの手探り。資金や運営方法など難問山積で、友人は次々とサークルを去った。一気に金集めを狙った大規模イベントは失敗。約百四十万円の借金を抱え、

「日本と違う世界伝えたい」ボランティア活動

卒業。現在は研修医として働く。今年八月、グラフィス診療所が完成すると、現地に駆けつけた。髪を黒色に戻した石松さんは「もう学生とは違う。社会人としてどう動けば社会の役に立つだろうか」と考えている。

曰「ろから「僕らに崇高なボランティア精神はない。土足で踏み込んでいい世界なのか」と疑問を感じていた。それでも「現実を伝えたい」という思いが勝った。そこで自分のこれまでの活動をまとめ「マジでカチンボランティア」(講談社)を出版した。

同名の映画も十二月四日から東京・渋谷のシネマインにて公開される。テレビ番組「イレクター」の里田剛さん(26)が三年間カチンを回した。里田さんは「彼らのありのままを描き、現実味のある作品にした。若い人、若者を知りたい年配の人に見てもらいたい」という。